

樋口芳麻呂氏藏 『和歌一字抄』 翻刻 (二)

葉室頼業筆本

日比野 浩 信

(前号の続き)

暁 暁聞鶯金

源雅兼卿中納言

鶯の木つたふさまにゆかしきに今一聲はあけはて、なけ

暁尋花

顕季卿

夢さめていそきそみつる山桜朝吹風の吹ぬさきにと (二七ウ)

同

藤贈左大臣長実

尋るをまたてや花の散ぬらん雪ふりにける春の曙

暁天尋花

俊頼朝臣

霞もや花のありかを尋ぬらんよをさへこめてたな引にけり

暁天水鶏

顕季卿

またし今は八聲の鳥も鳴にけり何おとろかす水鶏成らん

暁聞時鳥

源定信刑部大輔

一六 わきも子に相坂山の時鳥あくればかへる空になく也

山家暁萤 俊頼朝臣

一七 あしのやのひまほのくにしらむまでもえあかしても行萤哉

裏書 暁恋水無瀬殿  
歌合 (二八才)

一八 今はた、風やはらはらんうき人のかよひ絶にし庭の朝つゆ

暁時鳥 後拾 橘資成

一九 よひの間はまとろみなまし時鳥あけてき鳴く兼てしりせは

暁落葉 西行

二〇 時鳥かとね覚の床にきこゆるは嵐にたへぬ木のは也けり

行路暁月 金 興福寺 永縁僧正 别当

二一 もろ友に出とはなしに有明の月のみをくる山路をそ行

関路暁雪 永胤

二二 いかてけふ野かみ里を過ゆかん夜ふかく関の雪ふりにけり

鞆中暁思 俊頼朝臣

二三 いと、敷旅ねの床の露けさに鳴の羽かき涙そふ也」(二八ウ)

関路暁月 範永朝臣

二四 有明の月もし水にやとりけり今夜はこえし相坂の関

菊花暁芳 行宗卿

二五 暁に先匂ふなり菊の花まきの板戸のひまを求て

郭公曉過 同

〔天〕 天の戸をおし明方の時鳥いつくをさして鳴渡るらん

朝 朝見花 匡房卿

〔五〕 山桜わきそかねつるみよしの、よこ雲わたる春の曙

山家雪朝 經信卿

〔六〕 朝戸あけてみるそさひしきかた岡のならのかれ葉にふれる白雪

雪朝曉望 俊頼朝臣「(一九才)

〔七〕 なかめやる箱根の山をたかためにあくれば雪のふりおほふらん

裏 朝花 定家

〔八〕 世のつねの雲とみえすは山桜けさやむかしの夢の面影

五月雨朝 同

〔九〕 玉水もしとろの軒のあやめ草音月雨ながら明るいくよそ

暮晩夕 暮天落花 匡房卿

〔一〇〕 夕されはおほつかなしや山桜散かふ花の行ゑみえねは

暮天時鳥 顕季卿

〔一一〕 夕つく日いるさの山に時もあけいしまれおりはへて鳴郭公哉

晚聞時鳥 俊頼朝臣

〔一二〕 みくまの、はまゆふかけて時鳥なく音かさねよく度へ成トとも」(一九ウ)

盧橘晚薫 顕季卿

一七 軒ちかく花橘の匂ふかにたそかれ時そおほめかれぬ<sup>けい</sup>

水風晚涼<sup>金</sup>

俊頼朝臣

一八 風吹ははすのうき葉に玉こえて涼しく成ぬひくらしの聲

船中晚涼

橘俊宗

一九 夕月夜やとれる水に袖ひちてさすにす、しき高せ舟哉

山家晚望

國房

二〇 山かつの野かひの駒もかくる<sup>へい</sup>めり初瀬に草をしかひかけつ、

晚見躑躅

源仲正女

二一 入日さす夕紅の色はへて山下てらす岩つ、しかな

海上晚望

國房〔三〇才〕

二二 はるくと波間を分けてかへるめりしかまの奥<sup>うら</sup>の海士のつり舟

夕對卯花

資仲卿

二三 月にこそふせやの簾あけしかと卯花に又おろされぬ哉

夕紅葉

定家

二四 立田山雲のはたてにかけてをる秋の衣はぬきもさためす

暮山花

同

二五 誰か又雲のはたてに吹かよふあらしの峯の花をうらみん

暮山紅葉<sup>裏</sup>

同

二六 時雨つ、袖ぬれきつる山人のかへる庵はあらぬ紅葉、

暮山雪 光俊朝臣

山人のかへるつま木の道もなし更にそこゆる峯の白雪(二〇ウ)

暮望行客 經信卿

夕日さすあさちか原の旅人はあはれいつくに宿をかるらん

尋花日暮 國房

月待て又や尋ん桜花たそかれ時に成ぬとならば

花下日暮 行盛

妻木こりかへるしつせにことつて、今夜は花の下にやとらん

對泉日暮 藤仲実前越前守

けふも又入相の鐘そきこゆなるおほろのし水むすひつるまに

秋野日暮 藤時房散位

小倉山すその、薄まねきけり今夜はこゝに宿やからまし

旅亭秋暮 藤隆資武蔵守 (三才)

おもひきや旅の空にて村鳥の別る、秋を惜へしとは

山家歳暮 賀茂成助神主

山里は過行年の暮ことに人めはみえて老のみそくる

尋花日暮 家經朝臣

尋こし花にもあかす暮ぬれば春の過ぬる心ちこそすれ

花下日暮 橘栄職

三〇 尋きて花みるほとに山里の入相の鐘の聲きこゆ也

歳暮述懐 俊頼朝臣

三一 物おもふ年のわか身につもらすはまたみとり子といはまし物を

夜 野馬夜嘶 無名

三二 草しけみあはつの野へのたはれ駒夜にはいはゆる聲聞ゆ也」(三ウ)

叢中夜虫拾 平兼盛

三三 千年とそ草村ことにきこゆなるこや松虫の聲には有らん

夜思山雪 永胤供奉

三四 うた、ねにさゆる衣のけしきにて越の白ねの雪をしそ思ふ

春夜尋鶯 為義朝臣

三五 道しらは尋にゆかん鶯はいつれの花をねくらにかする

暗 暗夜尋梅花 山口重如

三六 くらければ色こそみえね梅花有とはかりはしられぬる哉

暗夜待時鳥 源兼澄陸奥加賀守

三七 くらき夜に我待かねぬ時鳥たとるくも初音きかせよ

山樹陰暗 無名」(三オ)

三八 夜と、もにはれすも有哉こかくれて山人いかてあくとしるらん

明 雨後月明 良暹

三九 今はとてぬへかりけりや時雨つる空ともみえずすめる月哉

葉落月明

藤國房

三六 月もるそうれしかりける我宿のそともの木立ときはならねは

三六 霽晴（マツ） 漢霽月明 俊頼朝臣

三七 晴ぬれはのこれるくまもなかりけり空こそ月の光成けれ

未晴 河秀未晴 源頼家前筑前守

三八 河秀の晴せぬ秋はわたしもりわたる人にや明るをはとふ

幽 谷水音幽 同

三九 石まわけもりくる谷の下水は音たに高くきこえさりけり（三ウ）

擣衣幽 定家卿

四〇 秋風にさそはれきえてうつ衣をよはぬ里の程そきこゆる

閑静（マツ） 閑庭梅花金葉於朱雀院詠之 經信（マツ）

四一 けふこゝにみえこりせは梅花独や春の風にちらまし

閑庭在明月 伊勢大輔上東門院女房

四二 有明の月はかりこそかよひけれくる人なしの宿の庭にも

雨中閑居 顯季卿

四三 五月雨にとふ人もなし山（マツ）とは軒のしつくの音はかりして

山館閑居 平源法師

四四 つれくのはては往来の跡もなき谷の庵に年をふる哉

月閑中友 橘茂通（三才）

三三 しまつかなる秋のよすから老らくの影をもはちす月をみる哉  
閑夜冬日 西行

三三 霜さゆる庭の木のはをふみ分て月はみるやとふ人もかな  
閑見月金 俊頼朝臣

三七 すみのほる心や空を払らつららん雲の塵みぬ秋のよの月  
山家冬閑 同

三六 あとたえてさひしき宿の冬の夜は山下風もとまらざりけり  
風静花香 同

三三 梢には吹ともみえて桜花かほるそ風のしるし成けり  
同 京極大殿

三〇 心ありてのとけき風のけしき哉こゝのへ匂ふ花のあたりは」(三三ウ)  
閑中時鳥 仁和寺左府

三三 とふ人もなきかけ里の時鳥誰にこたへてなのり行らん  
閑聞時鳥 惟平

三三 我ならぬ人はねにけり時鳥き、やしつると誰にいはまし  
不閑 花時不閑 嘉言

三三 さかぬより散まで花につけたれは春の心の空に成哉もある  
三三 涼冷納涼 松風晓冷 顕仲卿

三三 晓やをしまか磯の松かせに衣かさねよゆらの浦人



月夜自涼 俊頼朝臣

衣手や良はたさむし夏のよの月の光は秋の空かは

月前逐涼 同〔二四オ〕

しはつ山ならの若葉にもる月の影さゆるまで夜は更にけり

泉邊納涼 同

楸生ふるかた山かけの石井つ、ふみならしてもす、む比哉

水邊納涼 家經

かせ吹は川へす、しくよる波の立かへるへき心ちこそせね

同 俊頼朝臣

せく手にはす、しき事もよとみけり水音のみも思ひける哉

水風知涼 行宗卿

鶴舟さすとなせの瀧の夕かせにまたき袂に秋をしるかな

水風晚涼 俊頼朝臣

風吹そ蓮の浮葉にたまこえてす、しくなりぬ日くらしの聲〔二四ウ〕

寒 山寒花遅 顕季卿

吉野山春はなかはに過ぬれと雪消やらて花さかぬかも

泉声入夜寒 師賢

さ夜ふかき岩井の水の聲きはむすはぬ袖も涼しかりけり

寒夜明月 金

坂上定成 明法博士

二四 雪をく霜に月の光のかよひつゝ、あはれさやけき冬のよは哉

水邊寒草

公長卿 大 中 臣

二五 高根には雪ふりぬらしましは河ほきのかけ草たるひすかれりつゞ

野徑寒草

俊頼朝臣

二六 道すから枯のにたてるかほか花ふり分かみに霜をきにけり

月照寒草

新院御製「(三五才)

二七 雪をみなへし月の光に思いて、をのかさかりの秋や恋しき

温 泉温草色春

安法と師

二八 岩間なる泉ぬるけく成ぬれば汀の草に春はきにけり

照 月照梅花

俊頼朝臣

二九 色にこそ影をもそへめ梅花香をさへ月のもてはやす哉うんい

月照草花

関白

三〇 月影のいかにさせはか秋の野、千草の花のひもとくらん

月照紅葉

顕季卿

三一 うすくこく紅葉の色のみゆるまてくまなく照す夜はの月影げい

月照菊花

同

三二 いかはかりくまなき夜はの月なれや八重咲菊の数みゆるまて（三五ウ）

月照網代金

經信卿

三三 月清みせ、の網代による氷魚は玉もにさゆる氷也けり

月照旅宿 顕季卿

一五 いさゝめにさそはぬ月と諸友に旅のやとりに夜を明す哉

月照水 妻以森川  
小例 經信卿

一六 すむ人もあるかなきかの宿ならしあしまの月のもるにまかせて

月照田家 新院御製

一七 月きよみ田中にたてるかり庵の影はかりこそくもり成けれ

月照已室 マツ 俊頼朝臣

一八 閨のうへのひまをかそへてもる月は空よりもけにくまなかりけり

漏 月影漏屋 河原院  
哥合 無名 (三才)

一九 雨なれて年のふるにも我宿の月もるはかりあれにける哉

早速 郭公早過 匡房

二〇 あまのかるいそらか崎らのいのりそのなのりもはてぬ時鳥哉

暁知早涼 顕季卿

二一 秋風や良たちぬらん夢覚て袂す、しく成も行哉

田家早秋 金 藤伊通卿 大納言

二二 稲葉吹風の音せぬ宿ならは何につけても秋かをしらまし

遅 山寒花遅 顕季卿

二三 吉野山春は半に成ぬれと雪消やらて花さかぬかも

深山桜遅 經信卿

三三 いまはさけみ山かくれの遅桜思忘れて春をすくすな」(三六ウ)

③ 山桜遅開 頼家

さかんともおもはさりけり山さくら今はちるへき花にやはあらぬ

山桜遅開 頼家

三六 霞たつ春のなかはに過るまで心もとなき山さくらかな

同 範永

三五 一木たに今もさかなん山桜あすを待へき我身ならねは

遅速 花有遅速

藤兼伊 匡房 前讃岐守兼房イ

三六 昨日みし人は散ぬといひしかとけふまでさかぬ花も有けり

同 打聞 公資

三七 咲事の一度ならぬ山桜いつをか花のさかりとはみん

期 織女期秋

清原元輔 肥後守

三八 七夕にとふよしもかな天の河けふを契ていく世過ぬと

初始 初聞鶯

三條大納言 公実 (三七オ)

三九 けふよりや梅の立枝に鶯の聲里なる、はしめ成らん

同 実行卿

四〇 今そ聞み谷かくれのふるすより梢にうつる鶯の聲

初聞時鳥 俊頼朝臣

四一 時鳥は山のすそを尋つ、また里なれぬ初音をそきく

水草初長 匡房

なには江のあしもまこも、白菅もつのかむほとはえこそみわかね

池水初氷 紀伊入道素意法師イ

池水にやとれる月はくまなくて汀はかりそ氷そめける

同 隆資

うす氷今夜や池にとちつらんみなる、をしの聲もきこえぬ」(二七ウ)

盛 逐年花盛 顯輔卿

年をへてさきそふ花や君か代の末はるくのかさしならまし

萩盛待鹿 白河院御製

かひもなき心ちこそすれさをしかのたつ聲もせぬ萩の錦は

終 終日尋花金 源貞高朝臣

白雲にまかふ桜を尋ぬとてか、らぬ山のなかりつる哉

終日對菊 行宗卿

いつしかと朝戸をあけて菊の花月の光のさすまでそみる

終夜待時鳥 匡房後頼朝臣イ

あけぬなりつるにはなのれ時鳥待にはなかな物にそしらるれ

終夜見月 匡房卿「(三六オ)

秋の夜の上より月をなかめては明ぬるあまのそこそ惜けれ

終夜惜秋後 範永

云六 あけはては野へを又みんと花薄まねくけ色は秋にかはらし

終夜聞落葉 俊頼朝臣

云三 独ぬるふせやのひまのしらむまで萩のかれはに木のは散也

終夜聞虫聲 行宗

云四 秋のよをうちままとるまであかす哉虫の音ことに心うつりて

盡 花盡春残 源頼仲

云四 桜花しるしはかりものこらねは霞にのみそ春はしらるゝ

庭盡秋花 後 頼家

云五 我やとに千くさの花をうへつれば鹿の音のみや野へ。残らん」(云ウ)

同

云六 わか宿に花をのこらすうつつしうへて鹿の音きかぬのへになしつる

逐 逐年花盛 贈左大臣 長実

云七 老ぬれと猶や心の色ならん今年のみみる花盛かは

逐日花盛 永源

云八 昨日にもけふはまされる花なればあすの匂ふを思ひこそやれ

逐日散花 白河院御製

云九 咲しより散まてみれば木の本よ花も日数も積りぬる哉

同 三條大納言 公実卿

云一〇 吹風にちらて待へき花ならはななめする日もあらし物を

逐日草滋 顯季卿〔元才〕

三二 まくす原しける野へのけしき哉としはか末のみえす成行

逐夜待郭公 同

三三 さても猶ねていく夜にか成ぬらん山時鳥いづかひ今やきなくと

逐夜風涼 俊頼朝臣

三四 軒ちかき萩のうは風さえそめていくよか人にしのはれぬらん

氷逐夜結 藤孝善左衛門尉

三五 むは玉の夜をへて氷る庭の池は春と、もにや浪も立へき

秋花逐露開 元輔

三六 綻て花さきにけり藤はかま匂ひにむすふ露にまかひて

松下逐涼 六條宮後中書主

三七 とこ夏の花も忘れて秋かせを松のかけにてけふは暮ぬるそい〔三九ウ〕

月前逐涼 俊頼朝臣

三八 しはつ山ならの若菜にもる月の影さゆるまで夜は更にけり

樹陰逐涼 行宗卿

三九 葉をしけみ日影とをして神なひの杜のしつくそ冷ひやしかりけり

送 見花送日打聞 橘すだ為通監物

四〇 春はることにちさきぬちりぬと花をみて身のいたつらに老にける哉

風送菊香 新院御製

④此比はまかきの菊に風ふれて宿のあるしの袖かほるなり

菊送多秋 花園左大臣

露むすふ秋の数のみかさならはいくへかさかぬ白菊の花

嵐送山葉 俊頼朝臣

もる山の嵐のつてに紅葉、を誰本ノマ、はすにみて忍ふらん

花下送日裏 定家「(三〇才) おもはずに

木のもとに待し桜を惜まで思へはとをき古郷の空

漸 花漸少 関白

日をへつ、梢青葉に成はて、しつ枝に残る花は一ふさ

遠草漸滋堀川院  
中宮野合 無名

しかふつひへく成もゆくかな雉(5)なくかたの、みの、萩の焼はら

林葉漸紅 匡房卿

時雨するいはたのをの、柞原朝なくに色かはり行

漸傾月裏

物ごとに秋のあはれは数そひて空行月の西そすくなき

花漸少 大相國

けふも又散にけらしな桜花あすは青葉に成やはてなん「(三〇ウ)



同 俊頼朝臣

三〇 葉かくれはしはしもすまへ桜花終には風の根にかへすとも

夏草漸深 師時卿

三〇 夏草の野原にふかく成ま、に春みし道は跡たにもなし

三〇 稀希(マツ) 時鳥(マツ) 聲稀 三條大納言公美卿イ

三〇 三山出る聲き、しより時鳥いくかといふに今夜なくらん

郭公猶稀 藤隆經前美濃守

三二 常いっよりも卯月なかひく年なれは猶時鳥忍音そ鳴

希聞時鳥 顯季卿

三三 郭公やそ山までに尋きて只一聲は聞へき物かキ

花落客稀 源經仲皇太后宮権亮 (三才)

三三 知しらす花の盛はこし人のかれくのにのみ今はなる哉

山家人稀 伊勢大輔

三四 人めたにさひしき冬の山山里におとろかすとや嵐吹らん嵐吹らん

時雨聲稀 行宗卿

三五 誰宿にかたらふならん時鳥待かきねは夜かれのみしてマツ

稀通恋 俊頼朝臣

三六 ひる塩のと、みならずはやそ嶋を絶まかちなる浦みせましや

残散誰家 同

三七 おほつかな誰古郷の花なれや吹風にさへしられざるらん

残花薫風金

源 右大臣右大臣 右大將雅定

三八 散はてぬ花のありかをしられすはいとひし風そけふはうれしき」(三七ウ)

関路残花

俊頼朝臣

三九 さもこそはなこそその関のかたからめ桜をさへもと、めける哉

山家春残

俊綱

四〇 名残なく散てわかれし桜花また山里はさかり成けり

尋残紅葉良

四條宮下野

四一 心ありて風ののこせる紅葉はも尋る山のかひにみる哉

山家春残

国居朝臣

四二 行春も風にしられぬ花もやと山里をこそ過かてにすれ

不残 林葉不残

新院御製

四三 柞原散ての後の月なれば冬の木陰もさやけかりけり

延 見花延齡

顕季卿」(三七オ)

四四 なかむれはおの、えたへそ朽ぬへき花こそ千世のためし成けれ

増 雨増野色

康資王母大宮女房

四五 緑なる野へに色ます雨にこそ春の日数のふるもしらるれるけれイ

日増恋金

花園左大臣

四六 いと、敷面影にたつ今夜かな月をみよとも契らざりしをヒイ

見返事増恋返 頼政卿

ひき返しいもかかきたることのは、恨て今そねはなかけける

夜長増恋 定家

秋の夜の鳥の初音はつれなくなてなく／＼みえし夢そみしかき

松樹増色 行宗卿

松の色をこそにことしはまされりと千世をかそへて君そみるへき」(三ウ)

送日増恋 俊頼朝臣

日をへつ、あくらの濱の忘貝忘はてぬときくそかなしき

添 晁添虫聲 顕輔卿

虫の音も秋の日数や惜らん有明かたはもろ聲に鳴

同 行宗卿

夕露に聲たてそむる蜚明行ま、に鳴まさる哉

虫聲添恋 関白

さくからに露けさまさるさ夜衣すその、小野、松虫の聲

副 瞿麦副垣 後頼朝臣

かきねには葎の露も茂からんすこしたちのけやまとなてしこ

夾 卯花夾路 新院御製」(三才)

卯花のこなたかなたに咲ぬれはいと、そほそきをの、ほそ道

瞿麦夾水 源仲正

夏草の下行水に分られて二方にさく山(マツ)となてしこ

廻(マツ)繞 春駒廻澤 同

はみやよきさはのぬなはにつなかれて汀はなれぬつるふちの駒

卯花繞簷 三條大納言

山里は萱のかりふき軒をなみひまやはみゆるさける卯の花

秋花廻水 源縁法師

池水を鏡とやみる女郎花萩の錦をりをもたてにして

同 國基

秋の野をうつせは宿るいの池水は岸のまゝにそ花は匂へる」(三ウ)

同 橘成元

立よらん方こそなけれ女郎花野中の清水むすふはかりに

落葉繞樹以上同座 家經

風をいたみ紅葉おりしく木のもとに帰らん事カも忘れにけり

連 卯花連垣金 匠房卿

いつれをかわきてとはまし山かつのかきねつ、きにさける卯の花

連夜見月 頼家

敷妙の枕のちりや積るらん月のさかりはいこそねられね

同 関白

年をへてなかめぬ夜は、なけれ共月はふりせぬ物にそ有ける

同 行盛〔三言〕

よひのまのかたはれ月とみそめしをなかめそあかす有明の空

同 定信

山かつのねりそもてゆふ竹の戸を幾夜かさして月をみるらん

礙障（マヤ） 庭樹礙日 頸季卿

六月のてるひといへと我宿のならの葉かけて涼しかりけり

障卓夫恋（マツ） 俊頼

手枕をぬけてく、れはおそろしみはや出ましねみつのもとより

障人恋 同

あふ事はまれかの浦にあざりするあまもさのみや人めもるへき

隔 霞隔山 源兼澄

行かよふ花に心はわかねとも春（ウイ）に霞は猶へたてけり〔三言〕

霞隔山家拾 弓削嘉言

山里の家ゐは霞こめたれと垣根の柳末はとそみゆ

霞隔山樹 同

芳野山ふりにし雪（ウイ）の消せねは去年をへたてぬ霞成けり

霞隔山花 良暹

たなひけは匂ひもみえず山桜峯より遠に霞たえなん

霞隔残花 肥後皇太后官女房

立かくす霞そつらき山桜風たに残す花のかたみを

隔霞聞鶯 新院御製

⑤宮古にはまた里なれぬうくひすのかすみこ、にそ初ねき、つる

藤花隔垣金 越後花園左大臣家女房

あしかきのほかにはみれと藤の花匂ひは我をへたてさりけり

卯花隔隣 後頼（三才）

うの花のかき根はかりそ諸友にかよふ心そへたてさらけるなければ

水草隔船 関白

夏ふかみ玉江にしけるあしの葉のそよくや舟のかよふ成らん

隔夜時鳥 同

此暮に来なかさりせは時鳥二夜ときかぬ身とやならまし

隔浪見花水 元輔

岸ちかみ波のへたつる花の色はおりてたにこそみる程もにせめ

同 良暹

⑥なけきつ、川のこなたにすくるかな花みにわたるせをししらねは

秋雫隔水 俊頼

音羽河雫のほかなる瀧ならば岩もる玉の数はみてまし

霧隔女郎花

女郎花うちたれかみを夕雫にかくれてしたてとしほれれふすらんそ（三才ウ）

増隔紅葉金 仲実

③ もすのゐる櫛の立枝のうす紅葉たれ我やとの物とみるらん

隔遠路恋 関白

④ はるけさにいそきもたらぬ東路を恋の涙そまつくたりける

隔日恋裏

⑤ 三日月のわれて逢みし面影の有明までに成にける哉

雲隔遠望 後頼朝臣

⑥ とをちには夕立すらし久方のあまのかく山雲かくれ行

霞隔月 遠江

⑦ かつみれとおほつかなしや春のよの月は霞の遠に成つ、

同 下野（三才）

⑧ すみのほる光はみえて春のよの更行まゝに霞む空哉

秋隔一日 顕隆卿

⑨ みそきする汀に風の涼しきは一夜をこめて秋や立らん

籠 雫籠紅葉金 資仲中納言

⑩ 紅葉散山は秋雫絶せねは立田の河のなかれをそみる

梅花籠雪 重如

⑪ 梅の花にはひたなくは枝みえす降つむ雪をいかてしらまし

秋雫籠路 良暹

三三 行すゑもみえぬ路かな雫こめて千鳥の鳴は川へなるへし

蔵隠(マ) 款冬蔵橋

顕季卿

三三 かよひこしゐての岩橋たとるまで所もさらす咲る山吹

紫藤蔵忒金

良暹

三三 恁風の音せさりせは藤波をなに、か、れる花としらまし」(三三ウ)

秋花蔵路

經信卿

三三 白露にたへす萩秋おれふし柴てかるをの、かけた道イにもなし

落葉蔵路後

清成法橋

三三 紅葉ちる秋の山へはしらかしのしたはかりこそ道はみえけれ

雪蔵帰路

賀茂成助

三三 里人にとひてかへらん夜のほとにこし路もみえず雪降にけり

雪隠遠樹

藤堀河右大臣頼宗

三三 いかはかり降つむ山の雪なれはこすゑをふみて人のゆくらん

雪隠家

永成法師

三三 しとろなる軒もはたらにをく霜はあれたる宿のおもかくし哉

岸柳蔵橋

行宗卿(三三オ)

三三 あをやきのきしへにわたすたな橋はしたるしつえにうつもれにけり

款冬蔵橋

良暹法師

三三 山吹をおるとや人の思ふらんはしたとるまに分るま袖を



掩埋<sup>(マツ)</sup> 花掩澗水 藤原隆方

三六 散花のいはまの波をこめつれば山下水のをともせぬ哉

同 頼家

三七 山の井のみくさと花は成にけり残るをいかて人にくませし

花埋谷水 花園左大臣

三八 山里に散つむ花のなかれすはいかてしらまし谷の下水

落花埋橋 無名

三九 くれて行春やこれより過つらん花ちりつもる青柳の橋<sup>ホウ</sup>」(三毛ウ)

落葉埋橋<sup>金</sup> 顕季卿

四〇 小倉山嶺のあらしの吹からに谷のかけ橋紅葉しにけり

落葉埋菊 家經

四一 紅葉の外よりたかくつもれるや菊のさけりし所成らん

霜埋落葉<sup>後</sup> 無名

四二 おちつもる庭の木のはをよのほとに払<sup>リ</sup>てけるとみする朝霜

雪埋古橋 三条大納言

四三 あまさり<sup>ヤ</sup>あひ雪<sup>もつり</sup>はくたりぬ東路のさ野、舟橋たれにとはまし

雪埋行路 隆資

四四 行ま、に雪降ぬれはあさ夕にかよひなれたる道もまよひぬ

雪埋寒草 俊頼朝臣」(三六才)

いと、敷しとろにみゆるかるかやの (マ)

満 落花満山路 赤染

ふめはおしふまねはゆかむ方もなし心つくしの山桜かな

落花満庭金 内大臣実能

けさみれはよはの嵐に散はて、庭こそ花の盛也けれ

同 花園左大臣

庭もせにつもれる雪とみえなから匂ふそ花のしるし成ける

同 俊頼朝臣

はく人もなき古郷山イの庭の面は花ちりてこそみるへかりけれ

花満山 定家

花さかり空にしられぬ白雲はたなひきのこす山のはもなし (三ウ)

瞿麦満庭 顕季卿

わか宿は庭もまかきもおしなへて今盛なり撫子の花

菊満庭 六條右大臣顯房

白菊の乱てさける庭の面は月の光そいと、さやけき

同 頼家

朝霜のをける庭かともえつるは皆白菊の花にそ有ける

同 藤清家

さかりにも庭の白菊みゆる哉一枝おらん道しなきまで

同 信宗朝臣

㊦ 夕月夜それとわかれぬ白菊の匂にほとんどのしられぬる哉

紅葉満水以上同座 範永(三九オ)

㊦ 大井河ちる紅葉、にてらされて小倉の山のかけもうつらす

落葉満水金 顕季卿

㊦ 大井河いせきの音のなかれすは紅葉をしける渡とやみん

落葉満流 家經

㊦ たかせ舟にイ。しふくはかりに紅葉、のなかれて下る大井川哉

落葉満網代 俊頼朝臣

㊦ み山にはあらし吹らしあしろ木にかきあへぬまで紅葉つもれる(8)

路満池上 經信

㊦ 水鳥のつら、の枕ひまもなしむへさえけらしとふのすかこも

氷満池水 俊頼

㊦ けさよりはみはしの池につら、ゐてあちの村鳥ひま求らし(三九ウ)

(1) 「へ」の右側に重ねて「ヒ」(見セ消チ)あり。

(2) 「かくる」のようにも読める。

(3) 「いそ、か崎」のようにもみえる。

(4) 「なる、」——「ら」を削消して「、」に書き直す。

- (5) 「誰」のようにもみえる。  
(6) 「道」のようにもみえる文字。  
(7) 「制」のようにもみえる。歌題中「副」字も同じ。  
(8) 「り」のようにもみえる。

(以下、次号に続く)